

04

10分で読める
モバイル講演録



Tetsujo Otani

mobile
lecture text

本人
音声付

薬師寺僧侶が説く「中今」の教え

大谷 徹奘

はじめに

あなたは人の話を聞く機会がありますか？

家族、職場、友人など限られた人間関係の中で生きて、彼らと同じ価値観から抜け出せずにいるのではないのでしょうか。

人の話を聞くことは、あなたの価値観を変えていきます。

価値観を変えることは、あなたの人生を変えていくということです。

同じ毎日の繰り返し、将来への不安、何となくやりきれない倦怠感。

すべてはあなたの「価値観」が生み出しています。

しかし、「人の話を聞く」といわれても、すぐにそれを実行できる人は多くありません。

気軽に講演会に足を運べるようになった昨今でも、「忙しくて講演を聴く時間なんてない」「行ってみただけど、時間のムダだった」という声もよく聞かれます。

そんな忙しいあなたに贈るのが「10分で読めるモバイル講演録」です。

「10分で読めるモバイル講演録」では、移動時間や待ち時間などの10分間で、著名人の講演のポイントを電子書籍で確認可能。もし、その内容に「価値がある」と判断すれば、実際の講演やインタビュー(約1時間分)を音声でじっくりと楽しむことができます。

セミナーに行くための時間や費用は不要。

その上、ポイントはすでに書籍となっているため、内容をメモする必要もなく、集中して講演を聴くことができます。

また、本講演は加藤登紀子、鳥越俊太郎、渡邊美樹ら著名人1000人以上のインタビュー経験を持つ、プロインタビュアー・早川洋平がナビゲートすることでテレビなどでは聞けない著名人たちの本音を聴くことができます。今回のゲストは、奈良・薬師寺の僧侶・大谷徹柴さんです。

薬師寺僧侶が説く「中今」の教え／大谷徹柴
【本人音声付】10分で読めるモバイル講演録第4巻

目次

- はじめに
- 第1章 人はみな、ウソをつく
- 第2章 生き抜く
- 第3章 30年を経て見えた入り口
- 第4章 「中今」な生き方

第1章 人はみな、ウソをつく

師匠にあげられて薬師寺の僧侶となった少年時代。あまりの修業のツラさに脱走を試みて、引きこもりとなった青年時代。少年限の面接官として思うこと、東日本大震災で喪失した自信など、大谷さんが人生で培った価値観や思いを余すところなくお届けしたいと思います。

大谷徹契(おおたにてつじょう)

奈良・薬師寺執事。1963年、東京・江東区生まれ。17歳で薬師寺の故・高田好胤管長に師事し、薬師寺僧侶となる。龍谷大学文学部仏教学科卒業後、同・大学院修士課程修了。1999年から『心を耕そう』をスローガンに日本全国を法話行脚、年間数百回の法話会をこなす。そのよく通る声と話の面白さとキヤラクターで老若男女に親しまれる、薬師寺人気の僧侶。

著書: 『修しながら「行」むから修行という』(講談社)・『愛蔵版「愛情説法」走る!』(NHK出版)・『静思のすすめ』(文藝春秋)・『自分で選んだ道なのに』、『ころの薬』(以上、イーストプレス)、など多数。
大谷徹契サイト <http://www.tetsujo.net/> をご覧ください。

早川 本日は薬師寺の執事・大谷徹契さんにお話を伺います。まず、薬師寺の執事とはどのようなお仕事ですか。

大谷 普通の会社でいうと、住職は社長、執事長が専務、僕の肩書である執事は取締役の中でも平取ですね。こういえば、一般の方々には分かりやすいですか？

早川 分かりやすいです(笑)。先ほど、僕も法話を伺いましたが、1年中全国を回っているのですか？

大谷 一昨年(2011年)の8月16日までは、1年に270日くらい旅をしていましたね。僕の場合、多い年は6万人くらいが法話を聞きにきます。あまり大きな会場が好きじゃなくて、1番後ろに座っている人の顔が見えるくらいがちょうどいい。だから、せいぜい大きくても200人くらいかな。そのくらいだと自分の言葉をダイレクトに届けられる。年間6万人で1回に200人くらい聞いてくれるとしたら、大体、年に300回くらい法話をしています。多い時は30分のガイダンスを入れて400本くらいは話していますね。1日に1時間半の法話を3〜4本話す時もあります。今まで1番ハードだったのは、朝10時に札幌、昼3時から広島、夜7時から博多というスケジュールです。

ところが、昨年の8月16日に「法話だけではなく、境内の管理もしなさい」と異動があつて。会社でいうと、今まで営業だったけど、社内のフロア管理になったって感じかな。それでも年間100本くらいは法話をしています。

早川 僕は以前、大谷さんの著書『静思のすすめ』に感銘を受けたのですが、改めて「静思」について教えてください。

大谷 約2500年前、お釈迦様がご在世になり、約2200年前、初めてお経が文字化されました。その中でも僕は法句経ほつくきょうというのを専門にしています。僕はお釈迦様の弟子ですから、その法句経を生きる指針にしています。そこから自分の生き方を決めています。

お経をずっと読んでみると、「静かに」という言葉がすごくポイントなんです。静かな心で静心。静かに慮おもんばかるで静慮。静かに思うで静思。この静思

という言葉は国語辞典では静思^{せいし}と書かれているんです。私たちの国語に残った仏教語だと思います。

お釈迦様の世界を修行しながら訪ねると、お釈迦様は、人間はどうしても自分の主観でしか物事を見られなれないと思っっています。静思というのは、その自分の主観を少し横に置くこと。言葉は悪いけど、他人事として見て「おらん」ということなのです。

僕らは他人がトラブルに巻き込まれているのを見ると、「欲をかいているなあ」とか「いらぬこと言つて」と冷静に言える。でも、いざ自分事となると文句たらたらになるわけや。例えば、北海道のリゾートホテルに泊まるとする。ホテルの目の前には、一面の秋の景色と大きな湖がある。その日は全然風が吹いていなくて、湖面がまるで鏡のように秋の景色を映している。僕たちはその景色を見た瞬間「わあ、きれい！」と言う。だけど、自分が行った日に限って風があつて波が立っている。すると、景色は同じようにあるけれど、波が立っていて美しく見えない。

心もそれと全く一緒に、波立つもの。だけど、その心の波を押さえて、静かに考えたら分かるようになる。

お経を読んでいると、お釈迦様は僕らにこう言っているのだと思う。人間とは賢い生き物だから、心静かに物事を見聞きすればちゃんと真意が見えてくる。だけど、どうしても自分の思いのもと、フィルターを通して見てしまふから波立って素直に物事が見えない。僕はよく色々なお寺の境内を使つて行事、世間的に言えばイベントをやるけれど、屋外のイベントって雨が降るかものが気になる。それが普通で、僕もそうだった。でも、よく考えてみたら、雨は自分のお寺の上だけに降るものではない。世の中どこでも降っている。もちろんその時に、お天道様に文句を言つて晴れるんだつたら言えはいけれど、文句言つても何も変わりやしない。

僕はお寺で生活して雨とか風の日がものすごく好きなんです。なぜかかっていうと、雨の日には聞こえない雨の音、風の日には聞こえない風の音がする。お寺の塔の上には鈴が付いていて、それはよつぼどの風が吹かないと鳴らない。それがある日ガランガラン、ガランガランって大きな音を立てている。その音を聞いて「今日は風が強いな」と思うのが主観。だけど、客観的に見ると「普段は聞こえないあの音が、風の音で今日は聞こえる」という風に受け止める。これが静思の基本なんや。

僕は東京の大きな街で何不自由なく育つた次男坊で、その時に高田好胤^{こういん}という昭和・平成時代を代表する偉いお坊さんにあこがれて坊さんになった。当時の僕は、ご多分にもれず子供だから、花咲いている人を見ると花が咲いている部分しか見えていなかった。そこが悪いところやつたんや。

花咲いてるといふのは根っこがしっかりしてるから花咲いている。根っこのない花はないねん。例えば、今若い人達があこがれるAKBさんでもEXILEさんでも、皆さん方はあの華やかさだけを見るかもしれない。でも僕は、じーっとテレビを見ながら、この人達はこのテレビに映るまでにどんな苦勞を重ねてきたのだろうと、どんな根っこを持っているのだろう、というところを見る。

当時の僕はまだ子供で、根っここのことなんてよく分かっていなかったから、お師匠さんの花咲いている姿だけを見て薬師寺の僧侶になつてしまった。はつきり言つてしまふと、1000年以上歴史のあるお寺の修行場なんて普通じゃない。普通のお寺さんは、住職を継ぐために一時期、言うならば本社に入つて修行して、経験を積んで帰ってくるというのが基本。だけど僕は「薬師寺で死ぬ」「家には帰りません」という契約をして僧侶になる。薬師寺を辞めるときは坊さんを辞めるときなんや。

師匠にあこがれて薬師寺の僧侶になつて、契約書に契約したけど、実際の修業は厳しかった。僕は、人間って、ホントにずるくて汚い生き物だと思つていて、法話会に訪れてくれた人も全員ウソつきだと思つている。法話会に参加して、お寺にお参りするような人だから良い人かもしれないけれど、僕は人間には人に見せるための強がっている顔、カッコいい顔というのがあつて、それをはがしたらどんな顔が出てくるか分からないと思つている。はがしてしまつたら、ウソつきや悩みだらけの顔が出てくるような気がする。

僕は修行中、修行がツラくてツラくて仕方がなかった。何がツラかつたつて、それは自分が選んだ道だということや。人間はずるいから思い通りにならないと文句を言う。僕はずっと文句を言い続けていた。「お師匠さんに出会わなければよかった」「坊さんにならなければよかった」「修行のカリキュラムを決めたのは誰なんや」。しまいに、仏さんに向かって「仏さんさえないなかつたら俺は幸せだった」と本気で思つていた。もうそこはただの逆恨みの世界なんだよ。

僕はさらに進み、自分の命の否定にまで走つた。死んでしまえば楽になると、本気で思つてしまった。

薬師寺の僧侶になる人はみんな家を捨てて入ってくる人で、仲間だけどプロの集団なんだよ。そしてライバルでもある。僕には親子関係もなかったから、血のつながりもない。当然、年齢も全然違う。

世の中で一番怖いのは孤独だよ。人間はウソつきだから、強い顔をしなければいけない。迷つていません、頑張っていますっていう顔をしなければいけない。だけど内面はすごく弱い。自分がやることが正しいとか、自分が命を燃やしているとか、そういうことに対してはちよつと刺激されるとすぐにぐらぐら来るんだよ。その時は、「死んでしまえばいい」って、思った

よ。でも当時の僕には逃げ出す根性も、死ぬ根性もなかった。それが僕の1番の強みだった。自分の弱みが1番の強みだったんや。

サンプル版はここまでです。続きは、アマゾンにてダウンロードしてお楽しみ下さい。

薬師寺僧侶が説く「なかいま中今」の教え／大谷徹てつしょう柴（【本人音声付】10分で読めるモバイル講演録第4巻）

http://j.mp/1Onobile_otani_04

インタビューアー・プロフィール

早川洋平／はやかわ・ようへい
横浜生まれ。

中国新聞記者等を経てプロインタビュアーに。2008年には、インタビュー形式のインターネットラジオ（ポッドキャスト）番組「キクマガ」をスタート。加藤登紀子、鳥越俊太郎、渡邊美樹、茂木健一郎、石田衣良ら、130人以上のゲストが出演、年間150万ダウンロードを超える番組となっている。10、11年、横浜美術館「ラジオ美術館」、13年ユニクロCM「ステテコ&リラコ 風と暮らす篇」インタビュアー。
企業・機関・個人のメディアを創出するプロデューサーとしても活動。中核となるポッドキャスト配信サービスは、美術館、大学、病院、出版社、ラジオ局、ジャーナリスト、作家など、広く活用されている。「横浜美術館『ラジオ美術館』」「多摩大チャンネル」「鳥越俊太郎のニュースの職人チャンネル」「本田健の人生相談」「伊藤忠商事『THE 商社マン』」などプロデューサー組多数。

発行日 2013年6月30日第1版

著者 大谷 徹柴

発行者 早川 洋平

執筆協力 三村 真佑美

制作 Textrage 編集部

〒244-0804

横浜市戸塚区前田町 516-1-B-110

MAIL : tr-inquiry@kiqtas.jp

URL : <http://kiqtas.jp/>

Copyright (C) 2013 KIQTAS All Rights Reserved.

本作品の内容を無断で複製・複写・放送・データ配信などすることは、固くお断りいたします。